

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第423次発掘調査報告書 —

2020

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、日本が誇る世界遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をはじめとする建造物群が築かれて以来、400年を経た現在もその威容を誇っています。

姫路城下町は、姫山・鷲山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核施設が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されます。このうち内曲輪と中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され、保護・顕彰が図られています。

一方、外曲輪は近代以後、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨地域の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。今回調査を行った北条口五丁目の一帯は、外曲輪南東部の武家屋敷地に該当します。ここに発掘調査成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました出光興産株式会社様をはじめ、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言・凡例

1. 本書は姫路市北条口五丁目73番で実施した姫路城跡第423次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、店舗建設に先立って実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが行った。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、通し番号を付し、遺構種略号を前につけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。SK:土坑、SE:井戸、SD:溝
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会	館長	前田光則
教育長	課長補佐	岡崎政俊
教育次長	係長	森 恒裕
生涯学習部	技術主任	小柴治子
部長		中川 猛
文化財課		福井 優
課長		南 憲和
課長補佐	技師	黒田祐介
技師	技師補	山下大輝(調査担当)
埋蔵文化財センター		

目 次

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査成果	
第1節 基本層序	1
第2節 検出遺構と遺物	1
第4章 総括	2

図目次

図1 調査地位位置図(城郭図)	3
図2 調査区平面図	4
図3 1区平・断面図、出土遺物	5
図4 2区平・断面図	6
図5 2区出土遺物	7
図6 3区平・断面図	8
写真図版1	9
写真図版2	10
写真図版3	11
写真図版4	12
写真図版5	13

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

姫路市北条口五丁目73番において店舗建設が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城下町跡(県遺跡番号：020169)に所在する。

平成31年(2019年)4月3日付で出光興産株式会社より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会宛にあった。届出の内容に基づいて協議を行い、令和元年5月9日に敷地内の4箇所において確認調査(調査番号・20190054)を実施した。調査の結果、全ての調査区で遺構を検出した。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける281mを対象として、記録保存を図るため本発掘調査(調査番号・20190146)を実施することとし、令和元年6月12日に姫路市と事業者間で委託契約を締結した。

第2節 調査の経過

本発掘調査は、敷地内に残土置場を確保するため、分割して実施した。調査区名を便宜上1~7区と呼称する(図2)。令和元年7月4日に敷地南東側から調査を開始した。確認調査の成果に基づき、地山上で検出した遺構を調査した。調査はバックホウで盛土・造成土等を除去した後、人力で遺構検出、遺構発掘を行い、通宜、記録写真撮影及び遺構実測を行った。8月8日に現地作業を全て終了した。現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理等を実施し、本発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。

第2章 遺跡の立地と環境

姫路城下町跡は、姫路市域を南北に流れる市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、東は丹波・有馬方面、西は美作・因幡方面に通じる。また南の海上には瀬戸内海航路があるなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。池田輝政により、慶長6年(1601)から8年をかけて築城された姫路城は、平野部と独立丘陵である姫山・鷺山を利用した平山城である。市川の支流である船場川を西限とし、三重の堀によって内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされる(図1)。

調査地は、外曲輪南東部に所在する。調査地周辺の道路の多くは絵図に描写されており、近世段階から踏襲されていることがわかる。調査地は武家屋敷地に該当しており、第一次榊原氏時代(1649~1667)の『姫路御城廻侍屋敷新絵図』によると調査地周辺は「小川兵助」「神尾半右衛門」「三宅理左衛門」「梶塚八右衛門」などの武家屋敷が並ぶ。二次松平氏時代(1667~1682)でも武家屋敷が軒を連ね「上田宗庵」「小林平太」「句坂繪兵衛」「忠見喜衛門」などの名前が確認できる。第二次本多氏時代(1682~1704)の『播州備東郡国衛庄姫路図』では「坂出左衛門」「中瀬六左衛門」とある。二次榊原氏時代の絵図(1711)では「内藤」「田中」「トキタ」「中江川」などの名が連なる。また酒井氏入封初期(1749~)の絵図には「要左一衛門」とある。酒井氏時代中期(18世紀後半頃)には「齋藤五大夫」「吉田彦大夫」と記され、文化3年(1806)の絵図では「宇野八百藏」「塩沢基内」の名が確認できる。

つまり絵図に従えば、少なくとも17世紀中葉から幕末頃までは調査地一帯は継続的に武家屋敷が軒を連ねていたと考えることができ、それらに関連する遺構の検出が予想された。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

現地表は標高13.9~14.1mで西から東へと若干傾斜する。調査地の層序は3区西側を基準として述べる。地表面から0.40~0.60mまでが現代盛土、その下に約0.3~0.4mの厚さで近世整地層がみられる。以下局所的に中世耕土層が堆積し、この下層に暗オリーブ褐色細砂土の地山がある(図6)。

第2節 検出遺構と遺物

ここでは各調査区で検出した主要な遺構について述べる。なお、4区及び7区については調査区の大部分が攪乱を受けており遺構を検出できなかったことから割愛する。

1区(図3)

SK1 1区北東隅で検出した。検出面での平面規模は、東西0.4m・南北1.15m・深さ0.25mである。遺物は小片が出土したのみである。埋土の状況等から時期は近世以降と考えられる。

SK2 検出面での平面規模は、東西2.4m・南北0.3m・深さ0.65mである。大部分が攪乱され詳細は不明である。

SK3 SK2に切り込まれる。検出部の規模は東西1.0m・深さ0.4mである。遺物はない。

SK4 平面規模は東西0.6m・南北1.3m以上・深さ0.15mである。掘方形状は楕円形を呈すると考えられる。

SK6 平面規模は東西1.05m・南北1.5m以上・深さ0.22mである。掘方形状は楕円形を呈すると思われる。埋土からは備前焼播鉢(図3-1)が出土した。

SK7 平面規模は東西0.35m以上・南北2.2m以上・深さ0.2mである。掘方形状は不明である。遺物はない。

SK8 SK9を切り込んで形成される。検出面での規模は東西0.45m・南北0.6m・深さ0.27mである。堀方形状は楕円形である。

SK9 SK8に切りこまれる。検出面での規模は東西0.24m・深さ0.14mである。遺構の半分以上は攪乱を受けているため堀方形状は不明である。遺物はない。

SP1 1区北部で検出した。検出面での規模は径0.5m・深さ0.40mである。掘形は円形を呈する。柱心の周りには0.1～0.15mの根固め石が据えつけられる。なお建物等の復元には至らなかった。遺物は出土しなかった。

2区 (図4・5)

SD1 2区西部で検出した溝である。平面規模は幅2.56m以上・深さ0.9mである。遺構の東側は攪乱を受けているため、遺構の全容は判然としない。廃棄土坑の可能性も考えられたが、後述する3区SD2と一連の遺構であることが考えられること、一般的な廃棄土坑と比較して遺物の出土量が著しく少量だったこと、遺構の北肩から底にかけて斜め方向に遺物が堆積する層(図4-SD1-4層)と遺物を一切含まない層(図4-SD1-2層)を確認したこと、ある程度時間をかけて埋没した遺構であると考えられたため溝と判断した。溝の南側法面は調査区外に位置する。断面形状は北側法面の形状から逆台形状を呈する可能性が高い。埋土からは肥前系染付碗・皿(図53・4)、関西系統締陶器播鉢・施軸陶器(図55-8)などが出土した。これらから18～19世紀頃に埋没したと考えられる。

SE1 2区北西部で検出した石組井戸である。平面規模は掘方径2.8m・深さ2.39mを測る。掘方は円形を呈する。石組は標高12.7mで検出した。石組内径は0.83mである。検出面から約0.55mまでは石組が崩れていた。埋土からは硝子瓶などを含む遺物が出土することから近代以降に石組が崩され埋められたものと考えられる。上層からは関西系統締陶器摺鉢(図5-2)などが出土した。

SK13 2区中央部で検出した土坑である。遺構の東半は後世の攪乱を受けている。平面規模は南北3.4m・深さ0.87mを測る。遺物は焼締陶器鉢(図5-9)・唐草文軒平瓦(図5-10)・丸瓦(図5-11)などが出土した。いずれも近世後期とみられる。また下層からは、近世以降の平瓦片が多数出土することから廃棄土坑と考えられる。

SK15 SE1に切り込まれる。平面規模は径約2.4m・深さ0.6mを測る。掘方は円形を呈し、埋土は2層に分かれる。2層目からは肥前系染付碗(図5-12)・施軸陶器碗(図5-13)・施軸陶器蓋(図5-14)・丹波焼鉢(図5-15)が出土したほか、右巻き三巴文軒丸瓦(図5-16)も出土した。総じて18世紀頃の遺物と考えられる。

SK16 SK15の下層で検出した。東西2.4m・深さ0.55mを測る。掘方形状は円形と想定できる。

SP3 2区北部で検出した。平面規模は径0.32m・深さ0.37mである。掘方は円形を呈する。断面に柱痕跡が良好に確認できる。遺物はない。

SP5 2区北部で検出した。平面規模は0.46m・深さ0.29mである。掘方は円形を呈する。遺物はない。

SP6 2区北部で検出した。径0.23m・深さ0.2mである。掘方は円形を呈する。遺物はない。

3区 (図6)

SD2 調査区南部で検出した東西方向の溝である。平面規模は幅2.2m以上・深さ0.5mを測り、遺構南半は後世の攪乱のため断面形状は判然としない。2区で検出したSD1の西延長部にあたることから、一連の遺構であると考えられる。

SK17 調査区南部で検出した。平面規模は東西0.78m・南北1.75m・深さ1.0m以上である。

SK18 平面規模は南北1.35m・深さ0.55mを測る。遺物はない。

SK19 調査区北部で検出した漆喰塗の土坑である。平面規模は径0.75m・深さ0.40mを測る。遺物はない。

SK23 調査区北東部で検出した石組円形土坑である。平面規模は径1.04m・深さ0.38mである。掘方は円形を呈する。井戸である可能性も考えられるが判然としない。遺物はない。

SP20 調査区西部で検出した。径0.3m・深さ0.6mを測る。遺物はない。

SP25 調査区北部で検出した。平面規模は径0.27m・深さ0.29mである。掘方は円形を呈する。遺物はない。

SP26 調査区北部で検出した。平面規模は径0.18m・深さ0.48mである。掘方は円形を呈する。

5区

SK24 調査区南東隅で検出した。平面規模は東西0.6m・南北0.5m・深さ0.73mである。

SK25 調査区南部で検出した。検出面での規模は、東西2.5m・南北1.45m・深さ0.40mを測る。遺構の大半は調査区外に延び、全体の形状等は不明である。

6区

SK26 調査区南部で検出した。平面規模は東西3.0m・南北1.7m以上・深さ0.65mを測る。遺構は調査区外へと延びる。

第4章 総括

今回の調査で明らかになったSD1・2は、幅2.56m以上・深さ0.9mと比較的規模の大きい溝である。埋土下層からの遺物は、18～19世紀頃のものとは定まることが近世後期から幕末頃まで溝としての機能を保持し続け、幕末以降～近代初期に廃絶したと考えられる。SD1・2の性格は、敷地を区画する溝の可能性もあるが検出部がわずかであるため判然としない。しかしLSD1・2・SK13の検出により、18・19世紀の遺構を把握したことや城下町形成以前の耕土層を部分的に確認した点は大きな成果といえよう。

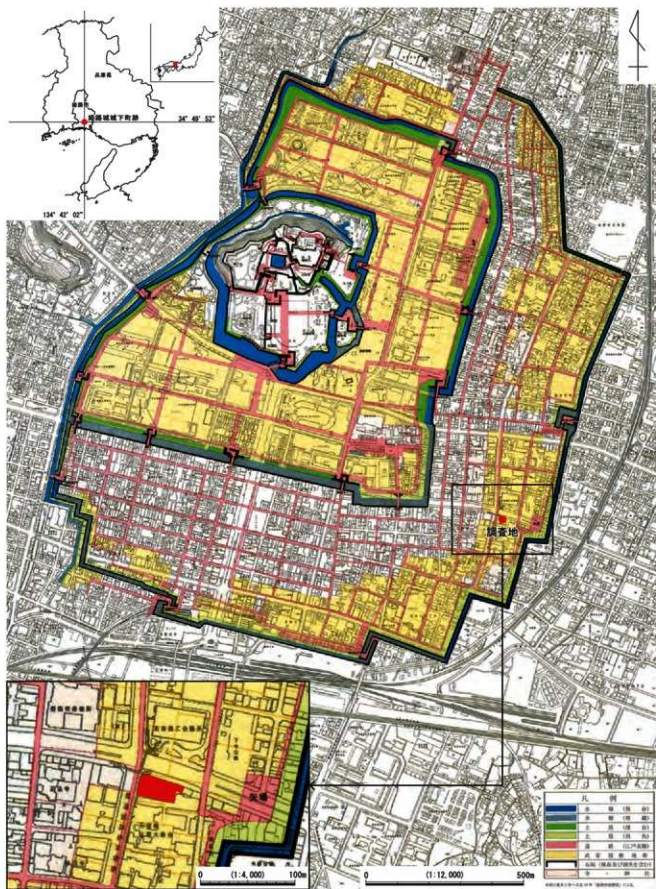


図1 調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』を一部改変・加筆）

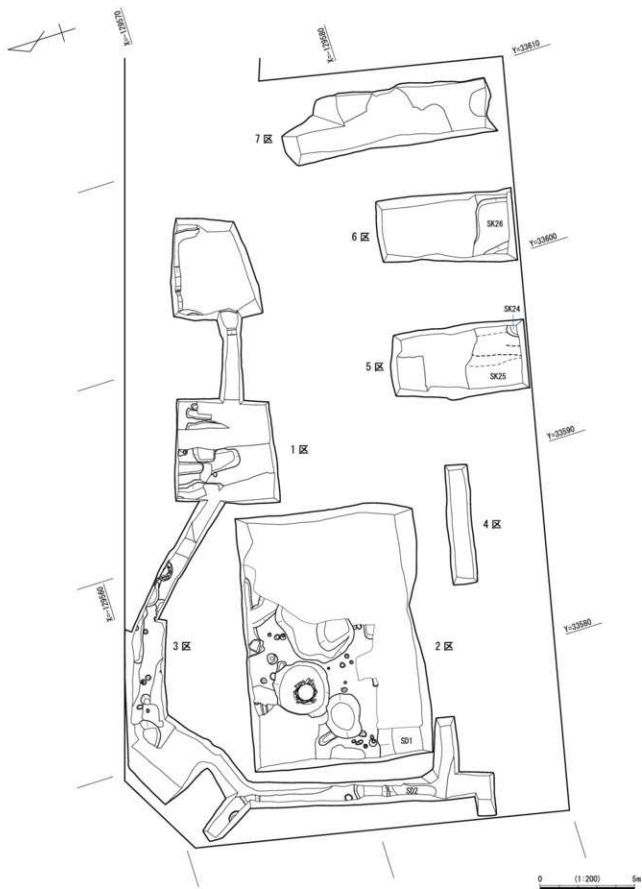
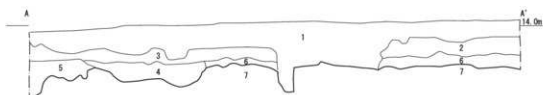
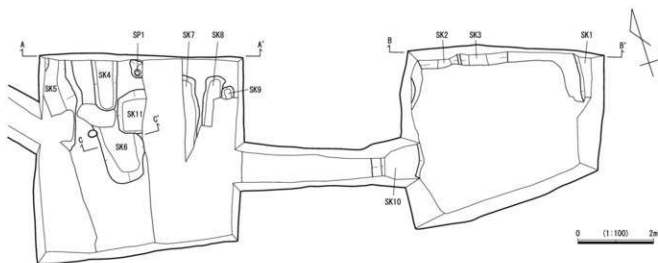


图2 調査区平面图



- 1. 造成土
- 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
- 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：炭を含む。
- 4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂：炭を多く含む。(SK4 埋土)
- 5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂 (SK5 埋土)
- 6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂：炭を含む。(中世隸土)
- 7. 2.5Y5/4 黄褐色細砂：地山



- 1. 造成土
- 2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
- 3. 10Y5/2 灰黄褐色細砂 (SK2 埋土)
- 4. 2.5Y5/4 黄褐色ブロック直じり 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂 (SK3 埋土)
- 5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 (SK1 埋土)
- 6. 2.5Y5/4 黄褐色細砂：地山



- 1. 2.5Y5/4 黄褐色細砂 (SK6 埋土)

0 (1:40) 1m



0 (1:4) 10cm

図3 1区 平・断面図、出土遺物

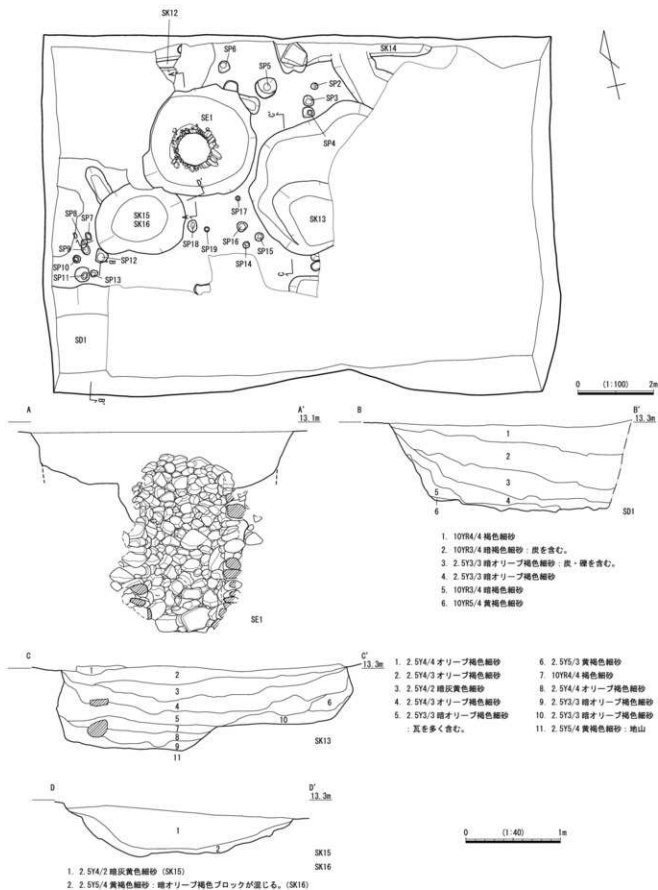


図4 2区 平・断面図

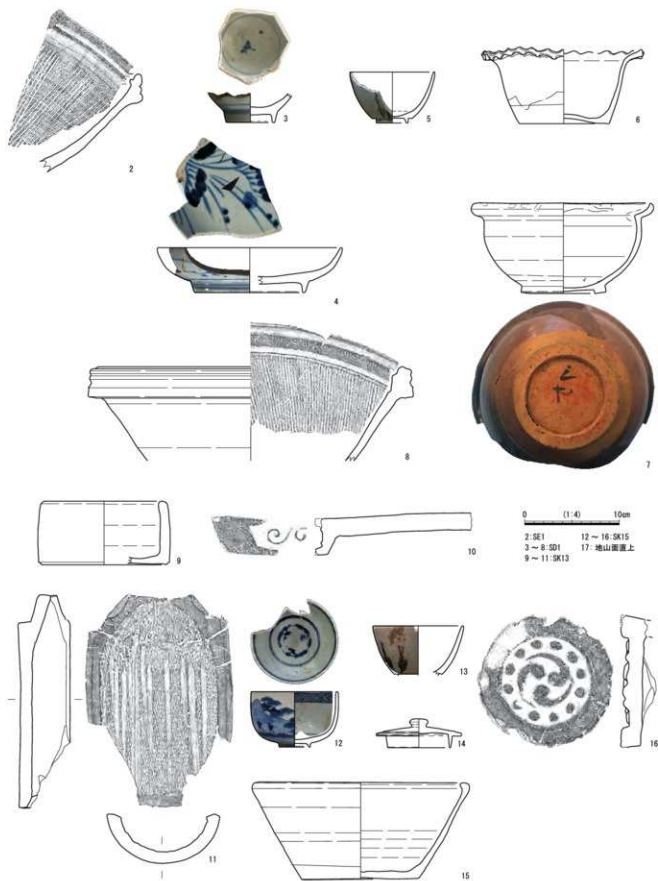


图5 2区 出土遺物

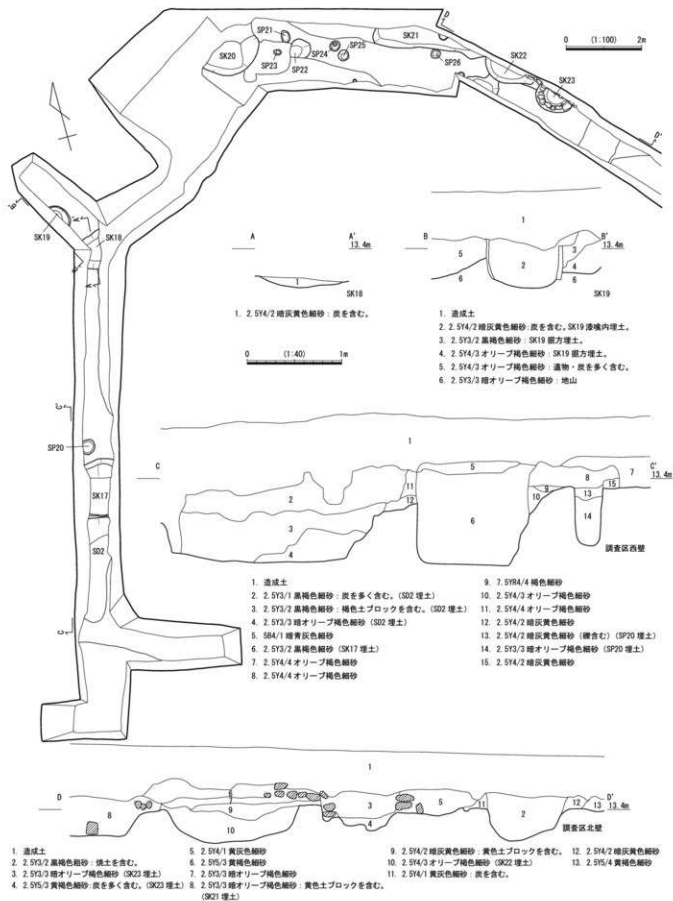


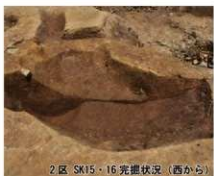
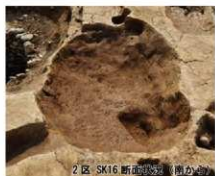
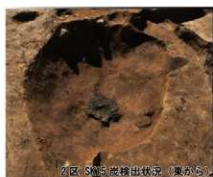
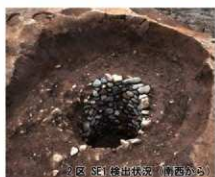
図6 3区 平・断面図





2区 全景 (横西から)







報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第423次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	山下 大輝							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和2年(2020年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡	兵庫県姫路市 北条口五丁目73	28201	020169	34° 49' 53"	134° 42' 01"	2019. 7. 4 ~ 2019. 8. 8	281㎡	店舗 建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号		
集落跡	江戸時代	柱穴、土坑 溝、井戸	土師器、施釉陶器、 焼締陶器、瓦			20190146		
要約	今回の調査では、江戸時代の柱穴や土坑、溝、石組井戸を検出した。溝は埋土からの出土遺物から18～19世紀に埋没したことが明らかになった。またこの溝は、形状・規模から武家屋敷地間を隔てる区画溝である可能性があり、姫路城城下町外曲輪南東部の一様相を示していると考えられる。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第102集

姫路城城下町跡

— 第423次発掘調査報告書 —

令和2年(2020年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目12-41

